



Niigata University
Campus Magazine

新大広報

campus forum

NO. 143
3月号

新潟大学広報誌

特集「卒業・退官」

●巻頭言——学長挨拶
新学長 長谷川 彰

●退任の挨拶——
前学長 荒川 正昭

卒業生、修了生の言葉

各部局 退官教官の言葉

キャンパスあれこれ

「ノーベル化学賞を受賞して」

「イスラームの歴史と現在」

留学生センター移転のお知らせ

新潟大学旭町展示館オープン記念展

「にいがた学のすすめ」

総合大学として本学の教育と研究の水準を高く保つためには、すべての部局の着実な均整のとれた発展が望まれます。

学長挨拶

このたび、荒川正昭先生の後を引き継ぎ、学長の重責を担うことになりました。荒川先生は熱意をこめて本学の改革に取り組んでこられました。その後を引き継ぐことを大変光栄に思っておりますと同時に、大

人的研究をも十分に評価することで本学の研究活性化を図って行くことが大切であると思います。大学の教育研究を高度に発展させるために、大学院における教育研究活動は重要です。そのために本学では、現在、教育研究の比重を大学院に移す方向で改革を進めていますが、それにふさわしい教員組織の構築について慎重な議論を行うことも必要です。

学生諸君には、夢をもち、理想を高くかけ、失敗を恐れずに進んでいただきたいと思います。



新潟大学長
長谷川 彰

な責任を感じております。

現在、わが国の大学は非常に厳しい状況におかれています。8歳人口の減少、高等教育の大衆化、経済成長の停滞等々、社会が大きく変化する中で、大学も改革が強く求められています。このことは、わが国の将来を担う人材の育成という大切な使命をもつ大学に対し、大きい期待がかけられていることの証左であると思われま

総合大学として本学の教育と研究の水準を高く保つためには、すべての部局の着実な均整のとれた発展が望まれます。教育研究の基盤となる設備や施設について一層の整備・充実を図るべきであると思います。現在、教養校舎の改修、附属病院棟の改築、総合研究棟の増築が順調に進んでいますが、校舎の老朽化と狭隘状態への対応策を講じることは全学に共通する緊急の課題です。

本学には、1,200名余の教員がいろいろな専門分野で教育研究活動を行っています。さらに、これらの教育研究活動には、2,000名余の大学院生が参加しています。これ程多くの研究者を有する大学が日本海側に存在することは、きわめて大きい意義があると思います。長年にわたって得られた教育研究の成果は、本学の貴重な知的財産として蓄積されています。これらの知的財産に、本学の学生だけでなく、一般市民の方々にも触れていただきたいと願っています。

今、本学はいろいろな問題に直面しています。本来の使命である教育活動では、信頼性の高い教育システムの構築が課題です。研究活動の面では、最近、わが国における研究分野を重点化するという、国の政策が強化され、大学における研究活動にも大きな影響を及ぼしています。このような状況の中で、重点化政策に符号する分野の充実を図りながらも、同時に、独創的な個

本学では、オープンキャンパスや公開講座などを積極的に実施しています。また、昨年12月には、本学の所有する学術資料や



研究成果を広く公開するために「旭町学術資料展示室」を開設しました。これらの営為を一層充実させることによって、一般市民の方々に、もっと学問への興味を深めていただきたいと思います。高校生以下の子供たちが大学を訪れる機会を増やし、私たちの教育と研究の成果に触れていただくことにより、学問に興味を持つようになる契機になってほしいと願っています。

また、企業の方々にも、私たちの研究成果に触れていただくことによって、必ず良い刺激を受けていただくことができると確信します。企業側としても、将来を生き延びて行くためのヒントがそこから得られるのではないかと思います。

今の時代ほど、自然科学が人間生活の細部にまで入り込んでいる時代はありません。このような現状を踏まえて、自然科学系の学生には、自然科学の知見や成果が世の中にどのような影響を及ぼすのかという問題により一層関心をもっていただきたいと思います。そして、人文社会科学系の学生には、少なくとも自然科学の基本的枠組みと考え方を学んでいただきたいと思います。さらに、医歯学系の学生には、診断や医療の分野で、いかに自然科学の研究成果が応用されているかに関心を持ち、自然科学の基礎やその限界をよく学んでいただきたいと思います。

本学は総合大学ですので、全学生数は1万人を越える程多く、各人が目指しているものも多様です。外国人留学生の数も380人を越えました。学生諸君には、互いの交流を深め、信頼し合える友人を大勢作っていただきたいと思います。また、先生方はそれぞれ経歴も違い、専門分野も異なります。人生経験の豊富な先輩として、先生方と専門分野の話題にとどまらず、世事に及ぶ事柄に

社会が大きく変化する中で、 大学も改革が 強く求められています。



についても積極的にお話することはとてもよいことです。早い段階から、先生方の考えや研究について知ることは、必ず将来の夢や希望を見いだす大きな手がかりを与えてくれると思います。

学生諸君には、夢をもち、理想を高くかけ、失敗を恐れずに進んでいただきたいと思います。そして、学生生活を送る間に、人生の目標を見つけて充実した学生時代を送っていただきたいと思います。私は、理想は努力次第で必ず実現できるものだと思っています。

近くには、日本海があり、お天気が良ければ佐渡も見えます。また、植物の宝庫である角田山や自然保護地域に指定されている佐潟などがあり、豊かな自然に恵まれています。このような雄大な自然環境の中で、本学のすべての教職員が落ち着いて教育と研究に打ち込むことができ、また、すべての学生が伸び伸びと学ぶことができるキャンパスの環境づくりに努力したいと思います。また、総合大学の特徴を生かした文理融合型の教育研究システムを確立し、地域社会から信頼され、愛される大学づくりにも力を入れたいと思います。微力ながら、本学のさらなる発展のために尽力する所存です。

文理融合型の教育研究システムを 確立し、地域社会から信頼され、 愛される大学づくりにも力を入れ たいと思います。

母校が、我が国の将来を担う若者に
大きな夢と希望を与えることの出来る大学として、
ますます発展することを願っています。



退任

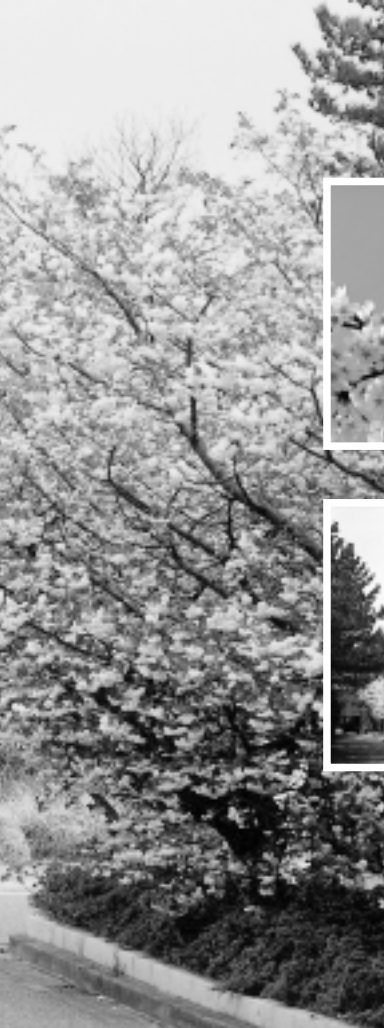


前学長
荒川 正昭

退任の挨拶

平成十四年一月末をもって新潟大学を離れることになりました。

四年前、学長職に選出された時、非才を省みずお引き受けしたただ一つの理由は、私に学びの場を与え、私を育み鍛え、医師、教育者、研究者として今日まで社会に貢献できる機会をくださった母校・新潟大学を心から愛し、ここで学ぶ若者たちのために少しでも役立ちたいと云う気持ちからでした。在任中、この気持ちが変わることなく



持ちつづけ、全力投球出来たことを、心から感謝しています。

平成に入ってから今日まで、国立大学は少しずつ変わってきているのですが、現在のままではいけない、変わらなければならないという考えが、最近ようやく当然のこととして認識されてきていると感じます。

世間では、国民の税金で支えられている国立大学について、「何をやっているのかよく見えない」、「国民の期待に応えていないのではないか」、「大学の常識は世間の非常識ではないか」、といった素朴な疑問が広がっています。また、我が国の大学は、

「国際的な視点からみると、まだまだ十分でない」、「世界の舞台で競争できる大学を育てることが重要である」、「戦後創立されて五十余年、いささか構造疲労を来している」と云う声も聞こえてきます。最近の我が国の経済財政状態、社会構成の変化（十八歳人口の減少）などの客観情勢も加わって、国立大学の改革の必要性が大きく叫ばれ、現在急速に進められようとしています。

法人化と統合再編、評価とそれにつながる資源配分、特色化と役割分担（重点化）、定員削減、任期制導入や学部・学科の教員枠移動の可能などは、「許し難い暴挙であり、大学を衰亡させるものである」という声も一部にはありますが、多くの関係者は、悩みながらも、この改革は必要であると認識しているのではないのでしょうか。

新潟大学は、我が国の基幹大学、また地域の拠点大学を目指して、改革を進めてきましたが、そのグランドデザインも明らかにされ、第一歩を踏み出したといえます。私は、新潟大学は、真面目に、地道に教育研究に努力している人が大切にされる大学であって欲しい、無為な人たちの楽園であってはいけないと思っています。教職員の皆様が、英知を結集して、この改革の歩みを止めることなく、一步一步着実に前進すれば、必ずやその前途は輝かしいものであると信じています。

母校が、我が国の将来を担う若者に大きな夢と希望を与えることの出来る大学として、ますます発展することを願って、退任の挨拶とします。

インターンシップや教育実習、楽しいことも辛いこともあったが、これらの経験は私の大きな宝である。私は周りの人間に成長させてもらった。

卒論をめぐる無駄話

人文学部 行動科学課程
上村 亮

大学生活最後の一年間、卒業論文執筆という大事業に取り組んでみて、何よりも痛感させられたのは、自分自身の無知・無能ぶりでした。そう、卒論は「無」との戦いであ

ではなかった！今や、こんな「無」意味な文章を書くことができるくらい、ほっとした気分です。

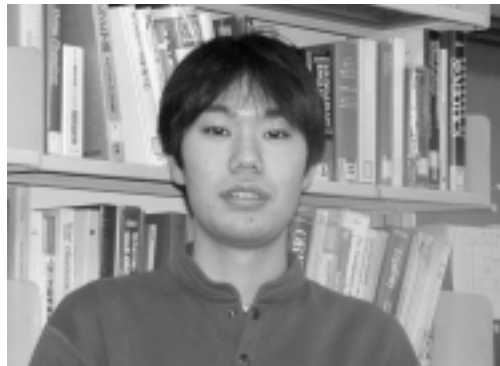
「四年間の出会い」

教育人間科学部 健康スポーツ科学課程
大和 芳

四年前、健康スポーツ科学課程は私達一学期もそして課程の先生方も手さぐりの中で始まった。インターンシップや教育実習、何もかもが初めての経験であった。楽しいことも辛いこともあったが、その中で培った貴重な経験は、社会の一員となるにあたり私の大きな宝になると思う。中でも私の大学生活での大きな宝は、四年間で得た友である。厳しい部活動を共にがんばってきた仲間、悩みを真剣に聞いてくれた友達、深夜まで無い知恵(?)を絞りだしながらがんばった研究室の仲間、私は周りの人間に成長させてもらった。四年間の出会いのように、これからも周りの人から多くを学び、そして自分自身も周りに影響を与えることのできる人間になりたいと思う。ここで全ての出会いに感謝をしたいと思う。優しくも厳しい指導をしてくださった先生方、多くの友人、そしていつも大きな心

卒論は、「無」との戦いであったような気がする。

卒業、
修了



ったような気がします。参考文献、紙と鉛筆、パソコン、といった「無」機物に向かい、「無」能な頭を使って振り絞るように文を書く。「無」をいくら積み重ねたって「有」が生まれるはずはないのに、締切日には一応それらしいものが誕生しました。奇跡です。この奇跡だけでもありがたいのですが、もう一つありがたかったのは、指導してくれる先生方、一緒にがんばっている仲間存在でした。無機物とのうんざりするような付き合いが、有機体(甚だ失礼な表現ですが)のありがたみを教えてくれました。そう、やはり「無」駄な努力



本人最前列左端

で私を見守ってくれた親友に心からの「ありがとう！」を言いたい。

卒業にあたって

法学部 法政コミュニケーション学科
加藤 知子

私の一年間のドイツ留学を含む五年間の大学生活は、興味のあることを好きなだけできた充実した楽しいものでした。先生方、友達にも恵まれ、様々な面で助けてもらいました。

一年間のドイツ留学も先生方の手助けにより実現しました。語学を学ぶだけでなく異文化の中で生活することで多くを学びとることができました。友人もでき、トラブルもたくさんありましたが、それにより一層たくましくなったと思います。



本人右から2番目

私はゼミではドイツ法、ドイツ研究等ドイツ関連の、やはり自分の興味のある分野を学びました。その中で折に触れドイツの文化を再確認し、日本との比較において新発見することも度々でした。先生方もゼミ生仲間もゼミだけでなくコンパやパーティーでいつも楽しく過ごせました。今卒業にあたり、思うことは私は幸せな大学生活を送れたということです。私をとりまく全ての人に感謝します。宝物のような時間をありがとうございました。

一年間のドイツ留学を含む五年間の大学生活。友人もでき、トラブルもたくさんありましたが、それにより一層たくましくなった。

修了にあたって

大学院経済学研究科 経営学専攻
高山 浩

社会人として大学院に入学して、三年が過ぎようとしている。本来二年である修士課程で、自身の不勉強により三年目を過ごしている。仕事をしながらということで、「仕事をしていて時間がないのだから仕方がない」という甘えを許してしまったらしい。

しかし、この一年は私にとって実に有意義であった。不思議なもので、研究に必要と思われる文献は読めば読むほど増えてくるように感じられ、必要と考えた領域はいつのまにか宇宙のような広がりを見せてくる。実に深く底を見ることはできなかった

が、この一年で研究に対する姿勢を少しは理解できたと感じる。

このような私を、時に厳しく、時に優しくご指導下さった先生方、親しみを持って接して下さった学務係の方をはじめ大学スタッフの方々に心から御礼申し上げたい。また、正門近くのカツ丼屋に友人達と通ったことはよい思い出となった。カツ丼屋の主人と友人達にもお礼を述べたい。そして最後に、土曜も日曜も研究室に通い家庭を顧みない私を、文句ひとつ言わずに笑顔で支えてくれた家族に、この場を借りて「ありがとう」と伝えたい。



本人左端

各学部卒業予定者数・各研究科等修了予定者数

人文学部	241名
教育学部	27名
教育人間科学部	354名
法学部	275名
経済学部	303名
理学部	204名
医学部	105名
歯学部	58名
工学部	540名
農学部	174名
医療技術短期大学部	162名
医療技術短期大学部 専攻科 助産学特別専攻	21名
人文科学研究科	19名
教育学研究科	44名
法学研究科	20名
経済学研究科	22名
医学研究科	40名
歯学研究科	36名
現代社会文化研究科	10名
自然科学研究科 博士前期課程	436名
自然科学研究科 博士後期課程	45名
養護教諭特別別科	44名

研究に必要なと思われる文献は読めば読むほど増えてくる。研究に対する姿勢を少しは理解できたと感じる。

自分が努力するのは当然。しかし優れた指導者や研究室の仲間といった人間関係に恵まれたおかげで達成できたことのなんと多いことか。

興味の効用

大学院自然科学研究科 物質基礎科学専攻
片野 孝幸

2年間の大学院生活を振り返ってみて、勉強や研究が大変だったことが思い出される。自分が努力するのは当然。しかし優れた指導者や研究室の仲間といった人間関係に恵まれ



たおかげで達成できたことのなんと多いことか。大体研究など、自分でやりたいと思って選んだものの、分からぬことが多く苦痛なものである。大義名分と実際は大きく異なるものだ。しかしどうせやるなら、楽しくやりたい。幸い理解のある人々が周囲にいてくれたおかげで、いろんなことに興味を持つことができた。興味を持つといえ、天邪鬼な自分は、反対する対象を見つけるのも一つの方法かな、と思った。しかしその時に、必ず代案を出すこと。そういうやり方で考えが進むこともあった。こんなことができたのも、寛大な人が多かったおかげだろう。しかしいつもは飛躍しすぎて、上手くないことの方が多いのだが。まあ、徐々に

試行錯誤で研究が進むのが面白く、人間らしいのだろうと思う。

旅立ち

医学部 医学科
高木 正仁

新潟での大学生生活もあっという間に過ぎ去った。いろいろと得るものも多く、実り多い学生生活だったように思う。入学当時の自分自身と比べて精神的にも身体的にも、かなり変わったことに驚かされる。良い友人たちにめぐり合え、良い先生方の導きがあったからこそだと思い、感謝している。

Sir Winston Churchill の言葉で、こう云ったものがある。

To improve is to change; to be perfect is to change often.

学生という安全地帯から飛び出し卒業とともに挑戦への第一歩を踏み出そう。



本人右側

卒業、修了

まだまだ足りないところの多い自分だが、これからもさらに精進し、いろいろなことに挑戦していこうと思う。困難を伴うこともあるかもしれない。しかし、その分だけ自分自身の喜びとなるものも大きいに違いない。それがまた誰かのためになるのなら、それ以上嬉しいことはない。学生という安全地帯から飛び出し、卒業とともに挑戦への第一歩を踏み出そうと思う。

卒業にあたって

歯学部 歯学科
小幡 葵

この新潟大学に入学してから早や幾年、いよいよこの学び舎を巣立つこととなりました。入学時に思い描いていたような事が実際に全て出来たとは思えませんが、時間は平等に流れ、また違った環境にわが身を置くことになり、残念な気もすれば、多少の期待と不安も持ちあわせた複雑な心境が自分にあるのを感じます。

このような人生の節目という少し大袈裟かも知れませんが、そういった時期だからこそ思ったことですが、この新潟大学で学んだ事を大切にして次の自分の活動の場で役に立てられたら、それだけでもここで学んだ事が大きな意味を持ち、自らの糧となるのだと思います。

出来る限り最大限、その意味と糧を大きなものにしていけるよう、色々な事を精一杯することは本当に大切な事だと思います。



新潟大学で学んだ事が
次の自分の活動の場で役に立てられたら、
それだけでもここで学んだ事が
大きな意味を持ち、自らの糧となる。

学部生活を振り返って

工学部 建設学科
小柳 健

振り返ってみると大学での4年間は非常に充実し、有意義な時間だったと思います。課題に追われながら深夜まで建築について語り合ったこと、友人たちと多くの建築物や町並みを見て回ったこと、建築事務所でのアルバイトを通して現場の空気を肌で感じたことなどはかけがえの無い思い出であり、自分にとってもプラスとなる経験でした。

また4年生になり研究室に所属し、良き先輩や同輩たちにめぐり合うことができました。その環境の中で一人一人の研究についてその成果を聞くこと、一人の研究について研究室全体で考え、意見をぶつけ合う事、その時間を共有することはとても楽しく、有意義な時間であったと思います。

今までの4年間をこの環境の中で過ごせたことは自分にとって非常に幸福なことでした。ここでは語り尽くせないほどの経験や思い出を大切にし、また新たな気持ちで大学院に進もうと思います。



一人の研究について研究室全体で考え、
意見をぶつけ合う事、
その時間を共有することはとても楽しく、
有意義な時間であった。

日本で身につけた知識を生かし、陝西省の経済発展や社会進歩に貢献することによって、諸先生方の学恩に報いたい。

充実した大学院生活

大学院自然科学研究科 生物生産専攻
杉林 直樹

大学院に入学したのが2～3ヶ月前であると錯覚してしまうくらい、サッと過ぎ去っていった2年間でした。改めて振り返ってみると入学前に思い巡らせていた事が努力不足

私は後悔するという事を実際に行った行動以外にもっと良い考えを思いついたと捉え、自分自身の成長になくはならない事だと思っています。

卒業、 修了



本人前列左側。同じ研究室の修了生仲間と。

もあり、思うように行動に移せず、今となっては「あの時ももっとこうしていたら」という後悔が数多く残ります。ただ、後悔が残ることは決して悪いことだとは思いません。私は後悔するという事を実際に行った行動以外にもっと良い考えを思いついたと捉え、自分自身の成長になくはならない事だと思っています。そういう前向きな考えで後悔した訳ですから私にとってこの2年間は充実していたと言えます。また、この2年間で充実していた後悔を理由にこうして言い切れるのも、同期の院生の手助けや先生方のご指導、そして2

年間の猶予をくれた両親他、多くの方々の支えや協力があつたからこそだと思います。今度は私が社会に出て少しでも多くの人々に貢献できるよう精進したいと思います。

修了にあたって

大学院現代社会文化研究科 日本社会文化論専攻
呉 鉄

新潟大学へ来て6年半の歳月が経過しました。日本での勉学生活を振り返ると、本当に感無量です。指導教官の藤井隆至先生をはじめとする諸先生方からの親切なご指導、またたくさんの友人からいただいたさまざまな応援のお陰で、私は無事に博士課程を修了することができました。本当に感謝の気持ちで一杯です。

帰国後、中国陝西省の幹部育成大学に復職し、行政管理の仕事をしなが、経済、農業の分野の授業も担当する予定です。陝西省は中国政府が掲げる「西部大開発」の重点実行地域で、観光産業、ハイテク産業、エネルギー産業などの一層の発展が期待されています。今後とも一層の努力をし、日本で身につけた知識を生かし、陝西省の経済発展や社会進歩



本人中央。故郷である西安市で「雪村友梅国際学術研究会」にて進行役兼通訳を担当。(雪村友梅は730年前の新潟県長岡出身の傑僧であり、元の文宗に「宝覺真空禪師」の号を送られ、西安の南郊外にあった翠微寺の住職に委任された)

に貢献することによって、諸先生方の学恩に報いたいと考えております。

中国経済は1970年代末からの改革路線の実施により、高いスピードで発展してきました。この発展に、隣国の日本は、改革の思想をはじめ、資金、技術、人づくりなどの面で各種の貢献をしてくれました。昨年末のWTO加盟によって、中国経済の国際化は更に進み、日中の経済交流はますます緊密化するでしょう。日中関係は、歴史問題や貿易摩擦などいろいろな問題に直面することがあるかもしれませんが、大きな流れとしては、良い方向に進んでいくことを確信しております。微力ながら日中友好の架け橋の役割を果たしたいと願いつつ、新潟大学をあとにします。ありがとうございました。

学生生活の終了にあたって

大学院自然科学研究科 生産システム専攻
青山 佳男

私はこの新潟大学へは編入学で3年生から大学院修了までの合計4年間を過ごすことになりました。最初の冬には大量の積雪を見てカルチャーショックを受けたりもしましたが、大学生活に関しては他の大学に進学した仲間達の話とは違い同期の学生達とはいきなり打ち解け、3年生の時は講義も受けつつ自分の想像していた大学生活をしっかりと満喫することとなりました。

長かった学生時代もとうとう終わりとなります。私も24歳になりました。同級生もちらほら結婚する者も出始めました。研究室生活は楽ではありませんでしたが、実際に社会人となるとさすがに不安も感じない訳ではありません。が、研究時間と年を無駄に食ったと言われない様にはやっつけていけるだろう、とは思っています。

最後に修士論文を完成させるにあたり御指導を賜った諸先生方、並びに助言を賜りました研究室の先輩、後輩達、4年にも及ぶ新潟での生活を楽しいものにし



本人左側

研究時間と年を無駄に食ったと言われない様にはやっつけていけるだろう。

てくれた悪友達に謹んで厚く御礼申し上げます。

卒業を向かえて

医療技術短期大学部 衛生技術学科
湯澤 郁恵

私がこの医技短に入学してからもう3年が経ちました。入学して学内実習が始まってからは1日が過ぎていくのが早いなぁと思っていましたが、最近はもう卒業なんだなぁと意識し始めてからは特に早く感じています。

私がこの道に進もうと思ったのは高校生の時で何となく臨床検査技師の仕事に魅力を感じたからでした。実際、臨床検査の勉強をしてみるとかなり難しく、実習も夜遅くまでやらなくてはならず、時々投げ出したくなる気持ちになりました。でも病院見学や病院実習をしているうちに逃げ出さず頑張ろうと思いました。そこには一緒に頑張っている友達や家族、先生方の支えがありました。こうして無事に卒業を迎えられ、ここまで頑張ってきたのは周りの人たちのおかげだと本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私はこれからも人との出会いを大切に、常に感謝の気持ちを忘れず、医療現場で貢献できるよう頑張っていきたいと思えます。



本人上段左端

こうして無事に卒業を迎えられ、ここまで頑張ってきたのは周りの人たちののおかげだと本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

国立大学は独法化に向けて新たな展開を迎えようとしています。一致団結してことに当り、しこりを残さず前進してください。

退官に当たって

人文学部 教授
苅部 恒徳



新潟大学に勤務して35年になります。定年まで無事来れたのも学生教職員の皆様のお蔭です。この場を借りて心から御礼申し上げます。本人にとってはあっという間の35年間でした。しかし母校でもある新潟大学にどれほどの貢献ができたか振り返って見ますと、内心忸怩たるものがあります。この間2度大きな変革を経験しました。一つは大学紛争であり、もう一つは教養部改組です。昭和4年に本学教養部に赴任して程なく、すでに全国のいくつかの大学で始まっていた学園紛争の嵐が本学ではまず教養部に吹いてきました。新潟大学では五十嵐への統合移転反対を叫ぶ学生たちによる運動がエスカレートしました。担任した農学部1年生のクラスが移転反対の意志表示として一昼夜ハンガーストライキを組みました。非暴力的な仕方で抵抗を示した学生たちは偉いと思いました。紛争は収束し、今改装中の教養校舎への移転も実現しましたが、学生教員共に虚脱感に襲われました。次に吹いたのは教養部改組の嵐です。特に私たちのような語学担当教員はいくつかの学部への分属が決まり、お互いつらい思いをしました。でも結果的には教養教育は全学でこれにあたる事が確認され、徐々に実行されてきていることは明るい展望です。国立大学は独法化に向けて新たな展開を迎えようとしています。一致団結して

ことに当り、しこりを残さず前進してください。

5年間の勤務を終えて

人文学部 教授
藤本 強



2度目の退官、しかも5年間という短い間の勤務であったので、さしたる感懐もないままに去ることになる。着任した当座は戸惑うことが多かった。それまで新潟市にはほとんど来たことがなく、また、新潟大学にも一度非常勤講師として来たことがあるだけで、およそ馴染みのない大学と土地に来たので、「新潟大学では」、「新潟では」の言葉に当惑することが多かった。

5年間居た今でも、正直いうと大学にも土地にも十分に馴染んだとはいえない状況のまま去ることになる。5年間何をしてきたのかを考えると、それらしいことは何もしていなかったのではないかという思いに駆られながらいるのが現在の心境である。

5年という歳月は長いようで短い。まとまった仕事ができるとは思っていなかったが、あっという間に過ぎていったというのが実感である。5人ほどの学生を卒業させ、5人ほどの修士を誕生させたのは、形の上では教育上の成果であるだろうが、それらの学生に何が残せているのかは自信がない。

国立大学をはじめとして大学というものがさまざまな面で大きく変わ

新潟大学の教育と研究が、地域に根づきながら良い形で展開していくように遠くから見ていたい。

退官

ろうとしている時に去ることになるのは幸運だといってくれる人もあるが、これもよくはわからない。新潟大学の教育と研究が、地域に根づきながら良い形で展開していくように遠くから見たい。

退官の記

教育人間科学部 教授
佐竹 昭臣



「東京生まれ、東京育ちのお前が、どうして新潟くんだけまで行かなければならないのかい」と母は嘆く。この母の嘆きを振り切って、私は家内と4歳になる長男とを引き連れ、上野駅から高田（現上越市）に向かって列車に乗った。長野駅を過ぎると列車は、深く霧の立ち込める山の谷底へと飲み込まれるが如く、滑り降りて行った。はたして自分の決断は正しかったのか、身の凍える思いであった。

あれから34年。長男も新潟大学がご縁で、気立ての良い嫁を娶り、二人の孫をもうけて仙台にいる。新潟行きを嘆いた母も、今では父と共に内野中権寺の霊園に眠っている。このたび東京方面に職を得て、川越に移り住むことになった私ども夫婦も、いずれは父母の傍らに安らうことになるであろう。まさに新潟は、新潟大学は、我が人生の全てである。

学部長として立ち会った教育人間科学部の新設は、文字どおり、私の命をかけての出来事であった。それは単に外圧に屈してのものではなく、私の長年の持論と夢とを実現するものでもあった。しかしその新学部の理念も広く理解されることもなく、今や時代の波にさらわれ、消え去ろうとしている。大学も、優れた「研究者」を擁してはいても、今や「大学人」という言葉は死語になりかけている。この大学の現状を憂いつつも、今はただ、ここまで私を支えて来てくださった多くの方々に、深甚なる謝意を表し、立ち去る次第である。誠に、長い間、ありがとうございました。

まさに新潟は、新潟大学は、我が人生の全てである。学部長として立ち会った教育人間科学部の新設は、文字どおり、私の命をかけての出来事であった。

生氣ある創造性の復活を願う

教育人間科学部 教授
小磯 稔



私は大学卒業後、企業やフリーデザイナーといった職業を通していろいろな体験をしてきた。音響製品や家庭用機器のデザインを始め、専門の漆芸、紅型染めや友禅染めの制作など数えたらきりが無い。その後、母校で色彩研究を重ね、当学部へ赴任したのが昭和52年である。

教員養成学部だからこそ、いままでの造形体験を幅広く学生に伝えようと意気込んで出勤したものの、私が担当する工芸やデザインの実習室や設備は何もなかった。それでも、当時の学生たちはハングリーな環境下で用具を工夫しながら造形を楽しみ、創造性を養ってきた。少しでも環境を整えようと、この24年間少ない研究費のほとんどを設備に費やしてきた。しかし、それもつかの間、美術科もいつの間にか映像やコンピューター主体の環境に変わってしまった。学生は手っ取り早いCGや奇抜な表現などに興味を注ぎ、デッサンや表現技法等の基礎の習得には興味を示さなくなってしまった。

赴任当時の学生たちは互いにモデルをしながら彫刻や絵画を描き、汗にまみれて彫金や木彫を行い、夜には酒を酌み交わしながら時間がたつのも忘れて葛藤をくり返していた。

何の苦勞もしないで情報が入手でき、無機質ながら一応の形は表現できる機器の発達により、そんなエネルギーまで奪い取られてしまったようである。

退官にあたり、生氣に満ちた創造力の復活を願ってやまない。

退官にあたり、
生氣に満ちた創造力の復活を
願ってやまない。

存廃のかかる状況のさなかに退官というのは、戦線離脱の趣でもあり、胸中複雑なものがあります。

退官の弁

教育人間科学部 教授
堀井 登志喜



5年間というのは決して短いとは言えませんが、私にとっては教職人生の最後だったこともあって、何を成したかは一向不明なまま、それこそ瞬く間に過ぎました。新潟の風土と人は大変温かく、仕事を離れてもこの地を去りがたい思い切なるものがあります。

教科教育学の世界には、どれほどのステップを刻み得たか、はなはだ心もとない限りですが、実践の場との接触が多く、県内の諸学校の先生方をはじめ、児童生徒のみなさんからも大きな力をいただき、改めて深甚の感謝を表します。

学生諸君は、朴訥でまじめな人柄が多く、温かく接してくれました。彼らの可能性に、新潟の教育の前途への希望を託したいと思います。

前任校を移る際にも、学部改革の真っ只中でしたが、今度もさらに一層困難を増した、存廃のかかる状況のさなかに退官というのは、戦線離脱の趣でもあり、胸中複雑なものがあります。うしろめたさと、一抹の安堵と、そして自身の行く末への不安がないまぜになっております。

少子化の時代でこそ、じっくりと教育に取り組む教師を育てるべきなのに、削減だ、統合だ、という騒ぎは、カイカクという鞭に右往左往する牧牛のようで甚だ残念です。

先生方の大いなる叡智と、学問教育に対する情熱と、つき進む意志の力で、ぜひこの難局を打開して、一層発展していただいくことを祈る次第です。

思い出 - ゼミ合宿 -

経済学部 教授
田中 章介



本学での在職期間が7年。その間に失業率3.1%から5%台へと悪化し、学生の最大関心事である就職をめぐる環境も一段と厳しくなった。私のゼミ生の就職活動や就職先も、その前半と後半では相違がみられる。

そのゼミ生との交流で思い出に残るのは、毎年夏休みの恒例となっていたゼミ合宿のことである。当然のことながら、参加は自由で強制されるものでないが、毎回出席率が高く、平均で一学年も名前後のゼミ生のほとんどが参加する。合宿の企画等は年長のゼミ長がリーダーシップをとり、自主的に運営される。具体的には夏休み前に選択した一冊の本を読了することが参加要件となり、初日分科会、二日目全体会議が開かれ、全員発言が求められる。と同時にコンパや観光などのレクリエーションが行われ、参加者全員の交流を深める。教師と学生や学生間の交流や親密さを促すために、こうしたゼミ合宿が欠くことのできない大事な役割を担っている。特に

教師と学生や学生間の交流や親密さを促すために、ゼミ合宿が欠くことのできない大事な役割を担っている。

退官

大学の部活動に加入していない学生の場合
は尚更その感が強い。

合宿地として咲花、瀬波、湯沢、麒麟山
の温泉地へ訪れたが、みんなの評価が高か
ったのが津川近くにある麒麟山温泉であっ
た。費用、サービスが学生の合宿に相応し
いだけでなく、阿賀野川に面した宿からの
眺望が抜群に良い。川幅が300m位を超
える清流と遠くに飯豊連峰の山々が一望で
きる。

将来、新潟へ来訪するときには、再び訪
れたいところである。

地域貢献と国際化におもう

理学部 教授
小林 巖雄

新潟大学に赴任して、3年10カ月になり、
この間、数百人もの学生と専門の地質学・
古生物学を通して語り合い、同じ釜の飯を
食べて山を歩く日々であったと思います。
大学は将来をつくる若い人を育てる場であ
って、そのために正しい認識と最新の知識をもつて若い
学生とともに創造的研究をすすめて行くことにある、と
厳しかった先生や先輩から聞いていました。教育と研究
が両輪となって走る大八車であると思いました。新潟で
の研究テーマに新潟と佐渡をフィールドとすることにし
たのもつい先頃ようです。先人に学び追い越せという
言葉を頭に、好きな山歩きをはじめ、地域の研究に飛び
込みました。これが地域への貢献につながる基になりま
した。昨年末にはテレビ放送公開講座で越後平野の大地
の動きとその未来を県民に話すことができたのは、喜び
でした。国際化とは人によりいろいろに受けとられてい



写真：2001年12月、ベトナムのメコン河デルタ
地域の調査にて

ます。それぞれの学問
分野によってレベルに
違いがありますが、国
際的レベルの仕事をし
ること、同じ立場で国
際的交流・共同研究を
することにあると思っ
ます。新潟大学や黒川
村などの後援を受けて

今後も、本来の使命に沿った
大学人の総意と創造にみちた改革と
その進展を願っております。

大学院時代から研究を続けてきたバイオミ
ネラルにかかわる国際シンポジウムを開催
することができ、旧知から若者まで分野の
壁がない研究集会を開けましたし、昨夏に
は研究科において隣国である韓国との地質
研究交流会を仲間と持つこともできました。
大学の改革はいまだ到達点に達していません。
今後も、本来の使命に沿った大学人の
総意と創造にみちた改革とその進展を願っ
ております。

定年にあたって

理学部 助教授
東 正彬



角田山や弥彦山など散
策に適した場所に生まれ、
また荒波の彼方には佐渡が島を
も眺望できるこの地で、優秀な新潟大学の
学生諸氏と歳月を共にする事が出来たのは、
私にとって幸いな事であったと感謝してお
ります。

自然科学研究科の威容も整いつつある一方で、大学は
今変革の時を迎えており、また社会情勢も厳しい時にあ
るようで、諸氏の置かれている状況もまたこの先も、必
ずしも安易なものでは無いかも知れません。私が学生だ
った時に伺って心に残っている中から、

知は力である

と言う言葉をお伝えしたいと思います。

知は力である。

諸君の真剣なまなざしと丹精なレポートや感想文によって、わたしは眼前の実物による「経験知」というものの重みを実感させられた。

定年退官に当たって

大学院医歯学総合研究科 教授
朝倉 均



昭和68年9月前任の慶応義塾大学医学部内科学教室から新潟大学医学部内科学教室第三に二代目教授として赴任してから18年半経

質の高い先端医療、安全な医療の場の提供。健全経営。病院職員のご協力を得ましてこの三つの目標を達成しつつあります。

退官

ちました。第三内科は消化器内科学の研究、教育、診療が担当ですので、これらの研究と診療の面白みを強調しましたところ、若い優秀な医師と一緒にやりたいということで、多くの門下生が誕生しました。研究は世界に通用するレベルで、かつ臨床にも役立つものを求めましたので、欧米のインパクトの高い学術雑誌に多くの論文を掲載することが出来ました。このことを今後若い人が継いでくれると思っております。

また、最後の2年は医学部附属病院院長に選ばれました。三つの目標、すなわち大学病院として質の高い先端医療を、大学病院で多く起こる医療事故に対して安全管理を充実して安全な医療の場を患者さんに提供すること、および病院の健全経営を掲げて努力しました。病院職員のご協力を得ましてこの三つの目標を達成しつつあります。

新潟の地にきましてまず驚いたことは冬の雷です。雷は関東地方では夏の風物詩ですが、新潟の冬空をよく見ますと積乱雲がよきに

よきと空高く昇っているのです。新潟の雪雲は日本海海水の暖かさとシベリアの寒波によって作られることを知りました。この雪が山に積もり、初夏に向けてゆっくり溶けることは自然のダムを意味し、新潟の自然に福音をもたらしていることを知りました。新潟の地で多くのことを学びました。

敗戦のころ

医学部保健学科 教授
川崎 了二



新潟の農村に生まれ小学3年の夏休みに敗戦を迎え、休み明け早々それまでとは正反対な趣旨の訓示を拝聴し、おって修身や国語の教科書のあらかたに黒々と墨を塗るよう指導（むろん強制）され、ショックでした。想えば、それは“戦後教育”のはじまりでした。貧困の当時田んぼには、おびただしくトノサマガエルがいました。捕まえてきて、ミカン箱の台にくくりつけ、男の子なら持っていた切り出しナイフで、安全カミソリと青竹をつかってメスとピンセットを作り、“解剖”をやりました。内臓をめちゃくちゃいじくって、ふと切り離れた心臓が動いているのを見たときのショックは、今でもまるでトラウマのようにしつこく残っています。あの“感動”を学生諸君にとおもいつつ早いもので、学校と縁が切れるときがきています。ウシガエルの神経筋標本（生物学講義中の示説）に対する諸君の真剣なまなざしと丹精なレポートや感想文によって、わたしは眼前の実物による「経験知」というものの重みを実感させられてきました。さて……。諸君（特に理系）は一般教育の実験をぜひ履修なさることです。“3

Kはごめんだ。だいいち選択科目だ”という人がいます。明治生まれの農機具（マンガクなど）職人だった祖父は、成人したわたしに、“若いときの苦労は買ってもやれ！”。当時、その含意はわかりませんでした。諸君も同様でありませうか。かんたんですが、幼稚なふたつのショック体験の思い出を枕にして、退官のことばといたします。

退官にあたって

医歯学総合研究科 教授
伊藤 寿介



本年3月末日で定年を迎えることとなった。1961年に新潟大学医学部を卒業して以来、ほとんどの歳月を旭町キャンパスで過ごした。最初は脳神経外科を専攻したが、やがて画像診断の魅力に取り付かれた。脳血管造影の勃興期に遭遇し、脳血管造影の静脈相の解析に寄与することが出来た。ついで、エックス線CT、磁気共鳴画像が開発され、画像診断は革命的に進歩発展した。偶発的なこととはいえ、その渦中に身を置くことができたのは誠に幸運なことであった。私には研究、診療、教育の三つの義務があった。前二者は、勿論、悩みに遭遇することも多かったが、概ね楽しむことが出来た。教育に関しては、医・歯両学部で携わったが教育のシステム、設備、および学生の学習意欲、学習の姿勢についてずっと欲求不満であった。教育のシステムは現在盛んに議論され、改良の方向に向かっているので大いに期待したい。しかし、最も肝心な点は学生の学習意欲、態度である。学習の動機づけの重要さが強調されたりするが大学に入ってからでは遅すぎるのではないか。肝心なのは学習の動機づけではなく、中、高校時代に人生への動機づけを自ら考えさせる機会を多く与えることだと私は思う。定年というとなにか重大な転機という認識が一般的なようであるが、長い人生の流れの一齣にしか過ぎない。私の生命の定年まではまだ多少の余裕があるようなので心を新たにしているいろいろな分野で今後の人生を楽しみたい。

肝心なのは学習の動機づけではなく、中、高校時代に人生への動機づけを自ら考えさせる機会を多く与えることだ。

大学人を終えるに 当って

工学部 教授
岡本 芳美



私が大学人になったきっかけは、昭和34年に大学学部を卒業して建設省で10年間の河川行政技術者生活を送り、8回目の転勤で建設大学の教官という職にあった時、教官から新潟大学の教授になられた人の招聘に当たられた方にたまたま会った事からです。私は、それまで研究という仕事に全く無縁であり、博士号も持っておらず、普通ですと大学の教官になれるはずがなかったのですが、専門に関する単独著書を持っていたため、新設の工学部土木工学科の助教授として資格認定されたようです。

私は、当時、大学を好きな学問・研究をしたい人達が専門別に集まっている場である。そこに居る人達は、学問・研究それ自体が目的で、社会に貢献する事などあまり考えていない事が多い。しかし、それでいながら社会に大変貢献している。すなわち、大学は、高等教育機関ではなく、学問・研究の場である、と考えていました。

私が大学に移って以来3年間が経ち、この間、大学を取り囲む環境は、激しく変わってきて、更にもっと激しく変わりつつあります。今の時点で私が行政技術者から大学人に転じたとしたら、大学はどういう場であると定義したでしょうか。

**大学を取り囲む環境は、
激しく変わってきて、
更にもっと激しく
変わりつつあります。**

小生が講じた内容がこれからの彼らの長い人生の中で、彼らの価値観に何がしかの痕跡を残すことを期待している。

大学における
教育と研究

工学部 教授
長瀧 重義



昭和38年12月に東京大学専任講師に任用されてから、東京工業大学助教授、同教授、新潟大学教授と続いた国立大学

今大学は何が求められ、何を追求すべきかを真剣に考えなければならないときにある。

退官

における教員生活も本年3月で終了することになっている。正確には38年4ヶ月の勤務であるが、この40年弱を振り返って見ると、皆様の御指導・御支援により一応の教育・研究の実績を残せたのではないかと考えている。しかし、大学において「教育」と「研究」は、時に相反し、時に相互助長する代物である。特に近年の大学に見られるように、自己点検、外部評価を実施したり、或いは最近のTOP30により大学間の競争を迎える時代になると、特に「教育」と「研究」の関係がより複雑化かつ錯綜化することになると思われる。

以前、若い大学人から教育と研究の比重の置き方について問われたとき、筆者は大学にあっては、勿論両方必要であり、かつ教育に対する比重は50%以上であるべしとの意見を述べてきたし、この考えは今でも変わらない。しかし大学における教官の評価が「教育」に対して十分になされていたかという決して

そうではなかった。今大学は何が求められ、何を追求すべきかを真剣に考えなければならないときにある。旧態依然の組織、人事、教育、研究を行ってはいは、近い将来淘汰されることは間違いない。今こそもう一度大学における「教育」と「研究」を考えてみようではありませんか。

5年間を振り返って

工学部 教授
村山 良昌



5年間ではあったが、一度はやってみたかった教師稼業を楽しむことができたことは、望外の幸せであった。招聘して戴いた当学科および工学部の諸先輩に心から感謝する。

この間に、専門教育や研究の面はともかくとして、たまたま前任者から後を引き継いだ教養教育の科目が忘れられない。「エネルギーと社会」と題して、人類の生存の根幹にかかわる諸問題、エネルギーのみではなく、人口、食糧、資源、環境などを幅広く論じ、えてしものごとを真剣に考えない1,500人を超える若者に、自分の問題として考えてもらえたことは、それなりに有意義であったのではないかと密かに自負している。Reportも幾度も書いてもらった。その内容が、たとえ「こまめに電気のスイッチを切るようになった」程度のことではあっても、小生が講じた内容がこれからの彼らの長い人生の中で、彼らの価値観に何がしかの痕跡を残すことを期待している。

「発展」が「量的な拡大」を意味する時代は終わった。新潟大学の真の発展、即ち、質的な充実を衷心より願っている。

最後に、これからの大学運営は困難を極めることが予想されることから、新学長の下で、方向を誤らず、適正な指導性が発揮されて、ますますその存在が世界に認知される大学になってほしいと望んでいる。

今後は、人類の将来に想いを馳せながら、静かに人生の幕引きの準備をして行こうと思う。それに、これまで同様大学教育に僅かな時間を捧げる予定である。

大学生活 28 年間

工学部 教授
山崎 一生



世の中の役に立っているという実感を日々味わいたい

という願いを込めて新潟大学に赴任して 28 年が経過した（この願いは叶えられていない）。最初の約 10 年間は平穏であった。時代が平成に移る直前から大学を取り巻く環境が変化し、事態は一変した。「大学の改革」が始まったのである。第 1 は工学部における大学科制への移行である。1 学年の学生数が 100 人程度となり、教官と学生との関係が疎遠になってしまった。学生にとっても教官にとっても望ましくない出来事であったと思う。第 2 は博士課程の新設である。新潟大学にも博士課程を設置したいという先達の努力の結果、博士課程自然科学研究科が 1985 年に設置された。研究の充実が期待される場所である。第 3 は教養部の解体である。教養教育に全学部教官が関わることとなり、小生も新たな経験をすることができた。大学（学部）は教養を高める場であると信じているので、教養教育がますます充実することを期待する。改革の一翼を担わされて雑務に追われ研究を存分にできなかったことは心残りである。

総合情報処理センター長を務めた最後の 8 年間に世の中は急激に変化し、コンピュータネットワークが学内のインフラストラクチャとなった。学内情報基盤の更なる充実、並びに、維持管理の外注化は当面の最大の課題である。

「発展」が「量的な拡大」を意味する時代は終わった。新潟大学の真の発展、即ち、質的な充実を衷心より願っている。



大学（学部）は教養を高める場であると信じているので、教養教育がますます充実することを期待する。

学生集団の示す現象は時として重要な問題を暗示している。「大学の曲がり角」を予知させてくれたことも。

学生に教わったこと

工学部 教授
渡辺 道昭



昭和 39 年にまず理学部へ。すぐに教養部へ、そして 10 年後に工学部へと移った。一貫して担当してきたのは教養課程（基礎課程）の「微分積分学」あるいは「解析学入門」である。

昭和 40 年代の学生はみんな優秀で恐かった。教える側の私はあれもこれも盛り込んで、ずいぶん生意気な授業をしてしまって恥ずかしい。10 年後には、理・工・農の各学部向の「解析学入門」の講義テキストができた。これらも 10 年後にはもはや内容が専門的過ぎて、使えなくなった。多種多様な方法で入学してきた学生には、もっと多種多様な「解析学入門」の講義を準備しなければならなくなった。「授業を理詰めですすめる」と白けて滑稽にさえなるので「微分積分のスゴロク」という系統図を作って、高校で学んだ定理と大学で学ぶ定理との関係を図で示したりもした。

嬉しかったことを 2 つあげる。私の取り組んでいた偏微分方程式が「土と植物と水」のある現象を記述したものであることを見せてもらって驚かされたこと。量子力学の学位論文完成のためのカギとなる数学の問題を一晩で解いてやって驚かせたこと。やがて私の研究を「理・工・農学に現れる偏微分方程式」とした。私の昭和 38 年の研究論文をもとに「非線形放物型方程式の差分近似による追求」と題する工学部学生向の講義テキストを作っ

て、工学部に移ったのであるが……。工業高校出身者のための補習授業は評判がよい。

忘れてならないのは、集団としての学生からも学ぶことが多かったことである。学生集団の示す現象は時として重要な問題を暗示している。「大学の曲がり角」を予知させてくれたことも。昭和 60 年代の「教養課程を修了できない学生の増加」という現象は「教養課程の大綱化の必要性」を暗示していたのだ。目下の「卒業できない学生の増加」という現象も何らかの「専門課程の改革の必要性」を暗示しているはずである。文部科学省より早く解が見つかることをお祈りしたい。

裏と表

自然科学研究科 教授
高橋 鷹志



日本海側での生活は小学二年生から三年生にかけての約一年間、山形への疎開以来のことであった。当時の記憶にも残っていたが、季節によって激変する気象に改めて驚かされた五年間であった。更には、東京の J R 山手線へ送電する発電所の稼働によって信濃川の水が枯れてしまったという事実を知ったのは「越後妻有アートトリエンナーレ 2000」の一行事に寄せられた中高生の詩からであった。

こうした中央と地方との関係に深く思いを至すようになったのは人文学部教授の古厩忠夫先生との出会いによるところが大きい。1999 年に私が主宰していた人間・環境学会の

今後、生活の質や福祉の向上に資する 環境形成、持続の方途に対して 発言していききたいと考える。

研究会で、先生に講演をお願いしたのがきっかけで、御著書の「裏日本論」(岩波新書)を教えていただいた。また昨年の秋に、日本インテリア学会第8回大会の講演に再度、登場していただき、新潟市民芸術文化会館の能舞台の壇上から「環境のおもてとうら」について御高説をうかがったのである。

「裏日本」という社会的格差の誕生の意味、つまり日本の近代化の過程で「表を支える裏」という構造が社会的発展の原動力となったこと、加えてこの対立関係を国内にとどめずによりグローバルなアジア北方文化圏のなかに位置付けるといった視点に目を拓かされた。今後、このような文化論を基にして、生活の質や福祉の向上に資する環境形成、持続の方途に対して発言していききたいと考える。

このようなきっかけを与えて下さった古厩先生に感謝申し上げる次第である。

私は、沢山のことを彼らから学びました。

来た当初、大学は世間と違うでしょうとよく質問されましたが、運営の原則は、日本の他の組織と同じです。ただ、よく言われる大学の頑迷性、一見非能率性、一見非合理性などは、何でも安易な利便性に傾き易い日本にとって、最後の理性の砦であり、貴重な存在だと感じています。新潟大学については、自由で闊達な学風があり、これからの発展に期待しています。大学の先生は、教育と研究の他に、第三の役割として、NGOなどと行政を仲介するような「仲介」の役割が大切だと思いました。彼等、彼女等は大変な情熱を持って行動していますが、沢山の困難を抱えています。大学の先生の話は割合素直に聞いていただけるので、仲介が可能です。これからも、助けていただくことが多いと思います。よろしくお願い致します。皆さんのご健勝を祈ります。心から、有難うございました。

留学生

- 新潟大学の宝物 -

留学生センター 教授

中村 正董



楽しい五年間でした。新潟大学の先生方、留学生達、日本人学生の皆さん、新潟で知り合った素晴らしい人たちに感謝します。新潟の気候も好きです。あっと言う間に変わる冬の天候も、人間の気分のように、めくるめくような感興を覚えます。

9年に留学生センターが発足して、初めからその運営に関与しました。留学生はその頃の約200人から、ほぼ倍に増えました。留学生会も出来ました。留学生は文化と情報の塊で、変貌を迫られた大学にとっては宝物です。

留学生は文化と情報の塊で、
変貌を迫られた大学にとっ
ては宝物です。

「ノーベル化学賞を受賞して」

講師：内閣府総合科学技術会議議員、筑波大学名誉教授 白川 英樹博士



今年の全学講義は、2000年度のノーベル化学賞受賞者である白川英樹博士を講師にお招きし、高分子学会北陸支部50周年記念講演会を兼ねて、平成13年11月10日に工学部101講義室で実施された。本学学生や教職員に中学生、高校生及び市民の方々を加えて約550名が会場を埋め尽くす中、渡辺教務課長の進行で講義は進められた。荒川学長の挨拶に続いて、宮内高分子学会北陸支部長の挨拶の後、青木工学部教授による白川先生の紹介があった。

白川先生は、昭和11年のお生まれで、昭和41年3月東京工業大学大学院理工学研究科博士課程を修了後、直ちに同大学資源化学研究所の助手に採用され、昭和54年筑波大学助教授、昭和57年同大学教授に昇任され、平成12年3月に同大学を退官され（筑波大学名誉教授）現在、内閣府総合科学技術会議議員として大変お忙しい日々を過ごしておられる。

2000年度のノーベル化学賞は、白川先生、マクダイアミッド博士及びヒーガー博士による「導電性高分子の発見と開発」の業績に対して授与された。導電性高分子のきっかけとなったポリアセチレンは、他の研究者によって1958年には合成されていたが、不溶不融の黒色粉末でその構造解析や物性測定は難しかった。白川先生はアセチレンの重合反応の仕組みを調べる目的で、アセチレンの重合実験を手がけておられたところ、韓国から来ていた研究生が1967年に自分にも実験をやらせて欲しいと申し出て、実験したが目的物が合成できないという。調べてみると、フラスコの表面に薄膜状の物質ができていた。失敗の原因を探るために触媒の濃度を変えて実験し、触媒濃度を通常よりも3桁高い濃度にするとうるみ箔状の金属光沢を持つポリアセチレンができることがわかった。



1975年に東工大に講演に来られたマクダイアミッド博士が、金属光沢を持つポリアセチレンに興味を示され、翌年、白川先生は渡米してマクダイアミッド博士やヒーガー博士と共同研究することになった。ポリアセチレンに電子を引き抜く性質を有する臭素をドーピング（少量を添加）すると、電気伝導度が10万から1億倍にもなることがわかり大騒ぎになった。そして、この結果を1977年の学会で発表したことが契機となって、導電性高分子の研究が盛んに行われるようになった。

講義の中で白川先生は「セレンディピティー」という言葉を強調しておられた。この語源はセイロンのおとぎ話にあり、「偶然をきっかけにして、素晴らしい発明や発見をする能力」を意味する言葉として用いられている。偶然をうまく発明、発見に結びつけるには好奇心とそれを認める力が必要である。好奇心や認知力は教育によって育成強化できるのか、また、偶然を利用する心構えを育てる方法があるのかということについて、白川先生は「私達があることをする場合、予想される結果ばかりではなく、予想されなかった結果もすべてを観察して記録する習慣を身につけることが大切です。」と述べられた。先生はさらに「創造性とはなんだろうか、そして創造性を育むためにはどうしたらよいのだろうか。創造性とは固定観念にとらわれずに自由な発想ができることであり、創造性を育むには何事にも率直な疑問を抱き、その疑問を解き明かすように努力することが大切ではないかと思います。」と締めくくられた。先生は、この後の学生の質問にも丁寧に答えて下さった。例をあげれば、「化学教育の在り方は？」という質問に、難しい質問で困ったという顔をしながら「今の大学生からでは手遅れだと思いますが、小・中学校でもっと独創性を育てる教育が必要であると思います。」と答えておられた。最後に、増田理学部長が謝辞を述べて全学講義は終了した。

（文責：理学部教授 増田芳男）

「イスラームの歴史と現在」

講師：東京大学大学院人文社会系研究科教授 佐藤 次高博士



平成13年11月22日(木) 14時30分から約2時間にわたり、東京大学大学院人文社会系研究科教授・佐藤次高博士を講師として迎え、法文棟A160講義室において全学講義を開催した。博士の専門は、イスラーム地域の社会史であり、西アジアのイスラーム社会について、諸制度から人物・物流に至るまでさまざまな角度から分析を行ってこられた。近年では、国際的な研究プロジェクトを組織され、すぐれた成果をあげられており、このような功績によって、平成13年度、学士院賞を受賞された。

今回の講義では、日本人と中東・イスラーム世界との関わりの歴史を通じて、「イスラームの歴史と現在」についてお話をいただくことができた。博士に全学講義を依頼したのは、アメリカのテロ事件が起きる以前だったが、この事件によってイスラーム世界への関心がわが国でも高まっていた時期にこのような講義を受けることができたのは、やはり幸いと言うべきか。当日は、人文学部、法学部、および経済学部の三学部の教官や学生をはじめとして多数の受講者で大教室が埋まり、講義後も活発な質疑が行われた。

講義「イスラームの歴史と現在」の概略は以下のものであった。

1) 日本人とイスラームの出会い

鎖国していた江戸時代、中東・イスラーム情報はオランダや中国を通じてもたらされていたが、明治に入ると、今度はヨーロッ

パ経由で情報がもたらされるようになる。偏見が少なからず混入しているヨーロッパ人のイスラームやマホメットに対する認識が、日本人によるイスラーム理解の原点になったのである。19世紀末には、メッカへの巡礼をはたした日本人ムスリムも出てくるし、中国・東南アジアへの進出とともに、アジア諸国におけるムスリムの実態調査も行われるようになる。

2) 戦後のイスラーム研究

この時期、日本でもイスラーム史やイスラーム思想の研究が本格的に行われるようになる。しかし欧米の大学への留学経験者が主流であって、欧米のイスラーム研究の方法を踏襲したものであった。

3) 新世代の登場と現代イスラーム世界

1960年代以降、日本のイスラーム研究は新たな展開を見せる。欧米ではなく、中東諸国に留学し、独自に現地調査と史料収集が行われるようになる。さらに1970年代のオイル・ショックにより、原油の産出国をかかえるイスラーム世界への関心が高まる。その結果、文化人類学、社会人類学、さらには政治学などさまざまな立場・分野から、現代イスラーム世界が分析されるようになる。このような動向をふまえて大型かつ国際的なプロジェクトも1980年代以降、組織されるようになる。しかし、わが国が中東においている海外研究拠点はカイロのそれだけであって、欧米に比べると著しく貧弱と言わざるをえない。これではイスラーム世界に関する生きた情報を収集することは困難である。

(文責：人文学部教授 關尾史郎)

留学生センター・留学生課の移転

NOTICE Of Movement of International Student Center

新潟大学留学生センターと留学生課は、教養校舎のリニューアルに伴い同校舎D棟3階「下記の図を参照のこと」に3月22日(金)に移転します。

留学生センターや留学生課にかかる業務の対応は、3月26日(火)からとなります。

新しい留学生センターには、留学生と日本人との交流を目的とした「交流コーナー」や、地域住民や各種国際交流ボランティアが交流や催し物が出る「地域・国際交流促進室」を設置しましたので、おおいに利用してください。

This is to announce that ISC and ISC office will move to 3rd floor of BIDG. D as indicated below on March 22nd.

The business starts from March 26th, Tuesday.

It is advised and encouraged to use "exchange corner" and "volunteer's corner" where various volunteer groups can promote exchanges and some events.



新大広報 BackNumber

139号 特集：卒業
 140号 特集：新潟大学学長インタビュー
 141号 特集：総合大学としての新潟大学の魅力
 142号 特集：総合大学の魅力 - すべてが教材 -
 バックナンバーが欲しい方は、事務局の学生部
 学生課まで受け取りに来て下さい。

お知らせ

新潟大学旭町学術資料展示室 オープン記念展

にいがた学のすすめ

期 間：2001年12月1日(土) ~
2002年3月31日(日)

開館日：木・土・日曜日
9:30 ~ 17:00 (入館無料)

休館日：月・火・水・金曜日

医学部 「“骨”小片コレクションは
人類のルーツを探る新潟大学の至宝」

歯学部 「歯科医療の近代史」

理学部 「新潟の稀産動植物と地質」

工学部 「近代科学・技術の礎
旧制学校時代の実験器具から」

人文部考古学 「にいがたを中心とする人類史の再構成」

教育人間科学部 「昭和20年代の洋画界の再出発
教育人間科学部所蔵作品を中心に」

図書館 「新潟の医学の先人たち
森田千庵、竹山屯、荻野久作の世界」

企画展示 「新潟・佐渡 内水面交通の歴史を探る」

主催・企画：新潟大学

問い合わせ先：新潟大学旭町学術資料展示室
新潟市旭町通2番町746 TEL025-227-2260

交通案内：新潟交通バス停

東中通下車徒歩5分 市役所前下車徒歩7分

駐車場はありません。最寄りのパーキングをご利用下さい。

連載しておりました「世界の都市」は
今回お休みしました。



キャンパス植物歳時記 新大の大きな樹③

図書館前のクロマツ(表紙写真)

図書館前の前庭には数本のクロマツが群生している。その中で最も大きい樹の幹周りは180cm。新潟市の条例では120cmを超えると保存樹の資格をもつ。人法経の前庭など大学構内のあちこちに見られる大きなクロマツの集団は、新潟大学が移転するはるか以前から、飛砂や風を防ぐため植えられていた防風林の一部だ。クロマツは新潟大学の重要な景観要素となっているが、拡大するマツノザイセンチュウ病によって急速に枯死木が増えている。紙谷智彦(農学部)

編集後記



本特集号は、そのテーマが年度末の定番であり、他号に比べれば編集企画上の工夫で思い悩むことは少ない。ただ、退官教員の感想原稿について、小見出しの表現で適当な言葉や文章さがしてちょっと苦労したといえようか。その甲斐あって、小見出しを拾い読みしただけで、退官される教員の様々な感慨が率直に伝わってくる。

(青柳)



人生の中で一つの「業」を成し終えた節目にあたり過ぎ去った時間を振り返ってみる。長い時間を過ごしたはずなのに、各場面がつい昨日のことにように蘇ってくる。辛いこと、苦しいことの方が多かったはずなのに、何故か楽しい思い出ばかりが記憶に残っている。もしかすると、それは天が与えてくれた恩寵なのかもしれない。辛いことや苦しいことばかりが記憶されていたのでは、長い人生を生きるにはあまりにむごいから。「卒業」というのは、どこか厳かな雰囲気か漂っているように感じる。その厳かな雰囲気の中に、安堵と一抹の寂しさが複雑に交錯している。読者にその辺の微妙な感じが伝わったとしたら幸いです。

(居城)

広報委員会第1部会

部会長	仙石 正和(学長特別補佐)	Tel 262-6751	sengoku@ie.
編集委員長	寺田 員人(歯学部)	Tel 227-2975	tera@dent.
委員	井山 弘幸(人文学部)	Tel 262-6573	
	石坂 妙子(教育人間科学部)	Tel 262-7116	ishizaka@ed.
	谷 喬夫(法学部)	Tel 262-6493	
	濱田 弘潤(経済学部)	Tel 262-6538	khamada@econ.
	石田 昭男(理学部)	Tel 262-6145	ishida@sc.
	山内 春夫(医学部)	Tel 227-2141	daba@med.
	川瀬 知之(歯学部)	Tel 227-2845	kawase@dent.
	谷口 正之(工学部)	Tel 262-6716	mtanig@eng.
青柳 斉(農学部)	Tel 262-6626	qingliu@agr.	
藤野 邦夫(医療技術短期大学部)	Tel 227-2362	fujino@clg.	

事務局(学生部) Tel 262-7330 Fax 262-7515 gakusei@adm.

(E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの表記を省略しています。)

新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

新潟大学学生部ホームページ <http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp>

この広報は再生紙を使用しています。